

墓石さがし

窪島 誠一郎

浄運寺小林覚雄住職と、福井に笏谷石をみにゆく。

笏谷石とは、亡父水上勉の郷里に近い越前足羽山で採掘される火山岩のことで、今回の二人旅は、近く当寺に建立する「父子墓」に使う笏谷石を品定めする旅。ご住職は、淡い緑青色が特徴の美しい石肌をもつ笏谷石が、私と父との墓にはうってつけとすすめてくださる。

ついこのあいだまでは、自分の墓をつくることなどツユも考えなかった私だけれど、住職のご親戚にあられる文芸評論家の秋山駿先生が当寺にお買いになった墓と、先年他界された作家中野孝次先生ご夫妻が眠る墓とのあいだに、電話ボックス二つ分くらいの空き墓地があるときいて心が動いた。母ちがいの落ちちゃん（水上路子）からわけてもらった父の遺灰が、父自らの作である小さな骨壺に入れられて、ずっと私の仕事机の横に置かれているのを思い出したからである。

もつとも、父の遺骨はすでにあちこちに分骨されているし、私は私で父から私を預って育ててくれた養父

母の待つ東京の墓に入るつもりではないので、浄運寺の「父子墓」はあくまでも私と父だけのプライベート墓ということになる。プライベート墓というのと変だが、いつてみれば戦争中に生き別れして戦後三十余年も経って再会した父子だけが占領する、余人立入禁止の墓とでもいったところだろうか。

それと、何たつて小林住職は、父に「影竹菴耕文掃階清勉居士」という戒名を授けてくださった人。

もともとの戒名は「影竹菴掃階清勉居士」だったのだが

「どこにも文学の文が入っていないのはさみしい」

という住職の提案で、私の手もとの位牌には急遽「耕文」の二文字が加えられたのだ。

そう、今回の福井ゆきは、私にとつてそんな「文学を耕した父」の位牌を抱いたセンチメンタルジャーニーでもあったのである。

福井の少し手前の鯖江に立ち寄って、そこにも笏谷石があるという石材屋さんを一軒のぞいたあと、住職

がひそかに本命視されている足羽山下のK石材店を訪ねる。K店は笏谷石専門店といつてもいい業者さんで、店のすぐ裏手が笏谷石の採掘場のあたる足羽山への入り口になっている。

近年山崩れがおきて同山の採掘場は半永久的に閉鎖されてしまい、現在K石材店にあるのは、これまでに採掘された貴重な在庫品であるとのことだ。

しかし、近世笏谷石がここから足羽川、九頭竜川を下って三国湊まで運ばれ、そこからさらに北前船によつて加賀、能登、越中、越後、出羽、陸奥、北海道の各地に運ばれたという史実があるので、ここが文字通り「笏谷石発祥の地」であることだけはたしかだろう。

「足羽の石が信州のお寺さんのお墓になるなんて、想像しただけでうれいすねえ」

浅黒く石焼けした、人のよさそうな顔をほころばせてK主人がいう。

「私らにとつちや、里の石がどこかにもらわれてゆくのは、自分の子を嫁にゆかせるようなもんですから」

そういえば、父に「石屋の音」といういい短編小説があったのを思い出す。若狭の石屋の息子が東京に出て文展にも出品する彫刻家になるのだが、出征したニューギニアで二十

九歳で戦死するという話だった。私がか戦没画学生慰霊美術館「無言館」を建設する十年以上も前に書かれたもので、父子がならんで店先で石彫のノミをふるう姿が印象にのこる小説だった。ちやうど主人公はK主人のような石工さんだったかもしれない、と私は思った。

財布との相談もあったので、その日のうちには注文しなかったのだが、私と住職が大体これにしようという笏谷石を決めて石材店を出たのは夕刻すぎだった。私たちは浄運寺に建立される「父子墓」の墓碑のデザインや、笏谷石をどのくらいの大きさにするかなどという話に花を咲かせて帰路についた。

いいわすれたけれど、K主人の話では、笏谷石は今から一七〇〇万年前の火山活動によつて噴出した火山灰や火山礫が固まって出来た石なので、御影石などにくらべると何倍も石質がやわらかく、何十年かすると彫り文字がすっかり消えてしまうというのが難点なのだそう。

「いいですね、何年か経つとだれの墓かわからなくなるなんて、それこそ私たち父子にはうってつけの墓ですよ」

と私がいうと、住職もわらって肯がれていた。

〔信濃デッサン館〕無言館館主